1 堀越城跡

南北朝時代の建武３年(1336)北朝方の武将曾我貞光が堀越に楯を築いたことに始まる。草創時の規模やその変遷は不明であるが、津軽為信の実父という武田甚三郎守信の居城となり、さらに為信が領知することになったという。

天正18年(1590)、津軽の独立を果たした為信は、文禄３年(1594)本拠を大浦城から堀越城に移し、あわせて家中諸士、神社仏閣、商家なども堀越へ移住させた。これは、政治及び経済面での領内支配強化のためといわれる。しかし、家臣の反乱で本丸が陥落するなど、軍事面からみると堅固な城ではなかったようである。

2 乳井神社

乳井神社は、坂上田村麻呂伝説のある毘沙門堂を中心とした福王寺の後身で、史料的には鎌倉時代前期までさかのぼることができる。

【板碑群】

板碑群は、神社境内とその周辺に分布していたが、神社の墓地の板碑は昭和初期に集められたものである。13基の板碑の年代は、鎌倉時代末期から南北朝時代に造立されたと考えられ、年号のあるものは14世紀初頭のものが多い。

3 薬師堂愛宕神社の板碑群

古来勢力を誇った乳井福王寺の領地であり、菅江真澄の『栖家能山』にも記録があるように、今なお５基の板碑が伝えられ、『陸奥古碑集』によれば、これらは地蔵堂跡から出たという。建立時期は鎌倉時代末期から南北朝時代と考えられているものもある。なお、地元では戦国時代の武将の乳井大隅の塚印と伝えるが、歴史的には符合しない。

4 乳井古堂の板碑群

中世以来、乳井には福王寺があり、宗教面だけでなく地域の土豪としても勢力を誇っていた。板碑のある場所は、毘沙門堂があった場所と伝えられる。また、正和５年(1316)、貞和２年(1346)などの年号を読み取ることができるほか、経文もあり、これらから毘沙門堂の存続時期などをうかがうことができる。乳井神社の板碑群と共通する点も多く、薬師堂愛宕神社の板碑群などとともに、福王寺関連の貴重な資料である。

5 五輪堂遺跡

曾我氏の墓所といわれ、集落南の水田に囲まれたリンゴ園にある。出土移建された板石供養碑(板碑)４基は、嘉歴２年(1327)・嘉歴４年・貞和２年(1346)の年号が刻まれている。岩舘は津軽の中近世の原点ともいわれ、大光寺城とともに曽我氏の拠点であった。

6 大仏公園(石川城跡、大仏院)

公園の入口にある大仏院は、山号を岩渕山と称し、本尊は釈迦如来で、川龍院の末寺である。寺伝によれば、岩館曽我氏の菩提寺岩渕寺を、慶長年間(1596～1615)に復活し、昭和27年(1952)、石川の川原田より、現在地へ移転した。寺宝の十一面観音像は、天正５年(1577)造立の銘があり、津軽地方の在銘仏として最古のものである。

1334(建武元)年に起こった「石川合戦」では、石川城によった幕府方は敗れ、朝廷方が勝利を得たが、この地も南北朝動乱の一舞台であった。初め曾我氏の居城であったが、その後天文２年(1533)に南部高信が城郭を構え、南部氏の津軽地方における一大拠点となった。しかし、元亀２年(1571)、大浦(津軽)為信によって滅ぼされた。為信は城代として板垣兵部を置いたが、兵部は慶長５年(1600)に謀反を企てて滅ぼされ、その後廃城となった。